

## 市民広聴会「市長と話そう」の記録 ②北市民センター

### ■開催の概要

日時	令和5年10月22日（日） 14:00～15:30
場所	北市民センター
主なテーマ	重点戦略2「いつまでも健康でいられるまちづくり」
参加者数	22人

### ■意見交換の概要（要約）

#### ご意見（ア）

- 中学校の統廃合に関して、西中学校の跡地に老人ホームや総合病院のような医療施設を整備するような考えはないのか。
- 西中学校跡地の活用については、老人福祉センター等の高齢者施設の機能を含めて検討を進めているところである。跡地の売却などは基本的には考えていない。地域のために活用していくことが基本であり、校舎は現状の建物を活用し、体育館は引き続き、地域の避難所としても活用していく考えである。

#### ご意見（イ）

- 若い世代を市に呼び込んで活気あるまちにしていくためには、子育て世代に対する手厚い支援が必要だと思う。一方で、豊かに暮らすために高齢者対策も必要であり、特別養護老人ホーム等の建設も視野に入れてもらいたい。本市は災害に強いというイメージがあるので、人を呼び込むために、この点をアピールするのがよいと思う。ごみ集積所の確保については、各自自治会任せになっているが、本来は市が対応すべきことではないかと思う。今後、集積所の確保が困難となることも予想される。当地はミニ開発の住宅地が多く、私道が多くあり、それらは砂利道や袋小路の道路が多くある。私道については、民間での対応が基本だろうが、何かしらの補助等を考えてもらいたい。
- 人口を維持していくためにも、本市に若い人に住んでもらい、子育てをしてもらうことが必要となる。子どもを生子、育てやすいよう、妊娠から出産、子育て期までの切れ目ない子育て支援を進めている。一方で、高齢者対策にも取り組んでおり、子育て世代、高齢世代の両方が住みやすいまちを目指している。
- 圏央鶴ヶ島IC周辺に企業を誘致し、若い人の働く場所の確保を進めており、IHIなどの企業誘致が進んでいる。引き続き、交通の利便性を活かした適切な土地利用を図っていく。企業誘致については、なるべく地元での雇用を生み出す業態の会社に来てもらいたいと思っている。
- 高齢者対策に関しては、時代も変わってきている中で、ニーズを踏まえて、色々な取組を進めていく必要があると考えている。健康づくりの基盤整備として、公園整備に投資をしてきた。農業大学校跡地の鶴ヶ島グリーンパークや運動公園のほか、市と株式会社関水金属が連携して、鶴ヶ丘児童公園と関水金属の工場敷地内の緑地とを一体で整備し、地域に開放していく計画を進めている。
- 本市は自然災害に比較的強く、台風などで高麗川が氾濫した場合でも、浸水する可能性は低い。地震についても武蔵野台地で安定した地盤である。また本市は、関越道と圏央道が交差し、交通利便の優れた

立地である。想定を超える事態はあり得るため、しっかりと準備をしていきたい。

→ごみ集積所については、地域の中で場所を設定して地域で管理してもらうことが理想である。市内に約1,300か所あるが、自治会長のもとで地域の皆さんで維持・管理を進めてもらうというのが本市の基本方針である。市道の砂利道については、少しでも舗装していきたいと思っており、通り抜け道路を対象に毎年一本ずつ舗装工事を進めているところである。

#### ご意見（ウ）

○ごみ集積所については、負担がかからない場所を探す必要があるが、地域の状況によっては不便な場所にしか見つけられないことも予想される。現状では、ある家庭の敷地の空きスペースを提供してもらっている状況である。自治会で調整が困難な場合、行政が導く必要があるのではないかと。

→ゴミ集積所については、自治会長のもと地域で対応をしてもらいたいと思う。市としては、直接指導するようなことは考えてないが、各地域の実情に沿ったかたちで一緒に考えていきたいと思う。

#### ご意見（エ）

○市職員の仕事の仕方について、各課で融通が利かないことが多い。例えば外来種駆除やごみの減量化など。剪定木や雑草の廃棄物については、乾燥してから出すといった指導があってもいいと思う。

→雑草等は乾かして出してもらった方が処理場管理者としてありがたいのは、ご指摘のとおりである。ご意見として伺っておく。

#### ご意見（オ）

○市内には河川が少ないが、土砂が堆積して流れが悪くなっているところもあり、整備はどうなっているのか。介護保険に関して、介護保険を使わない人にポイントで還元するようなことで、さらに介護保険の利用者が減るのではないかと。つるワゴンについて、自宅の近くを通るルートを考えてもらいたい。

→河川の浚渫は定期的に行っている。ポイントのために介護保険を使うことを我慢してしまうのは問題であり、ポイント制についてはよく考える必要がある。ご意見として伺っておく。つるワゴンの運行ルートについては、いろいろなご意見を総合的に勘案して現在のルートとなっている。

#### ご意見（カ）

○毎朝ウォーキングをし、ラジオ体操も20～30人で行っており、健康づくりに役立っている。健康づくりの講座等につるワゴンで出向こうとすると、ちょうどよい時間帯の便がないことから、講師等の関係者の交通費を市で補ってもらいたい。

→健康づくりとなるラジオ体操はぜひ進めてもらいたい。現在つるバス・つるワゴンは、70歳以上が無料であるが、100円でも負担してもらえれば、ルート・便を増やすことができたのではないかとという意見もいただいている。

#### ご意見（キ）

○横浜市に通勤しているが、夜間の東武鉄道の本数が減って、坂戸駅で待ち合わせることが増えた。一本松駅の南口には未だ出入口がない。利便性を高めるよう、東武鉄道に申し入れてもらいたい。

→東武鉄道とは話し合いを進めている。また、本数を増やしてもらえるよう、毎年伝えている。貴重なご意見として伝えていく。

#### ご意見（ク）

○北市民センターのカラオケをレーザー方式にしてもらいたい。自治会の役員に手当を出しているのなら、広報紙の配布等は担ってもらおうのでよいと思う。免許返納者に、タクシーチケット等の補助をお願いしたい。スマートタクシー等の検討をしているのか。

→北市民センターのカラオケ設備については要望として伺っておく。自治会の件はありがたい。デマンド方式バス等の検討は行っている。

#### ご意見（ケ）

○人口が減らないよう、市のまちづくりの取組について、市外の人にも見えるかたちでアピールしてもらいたい。地域の人たちの身体や心の健康維持を目的に、地域で支え合いの活動しているが、担い手が高齢化し、少なくなっており、何らかの解決策をお願いしたい。北市民センターの2階に上がれない高齢者が多くなっているため、リフトのようなものを検討してもらいたい。

→市内に8つの地域支え合い協議会があるが、いずれも後継者の問題がある。少しずつ若い世代に代わってもらいたいと思うが、協議会のそれぞれに考え方もある。市担当課とも相談しながら進めてもらいたい。各市民センターは老朽化が進んでいるため、順次対応を行っている。照明、トイレ等の改修については概ね終わったところである。今後エレベーターの設置等も検討していく。

#### ご意見（コ）

○子育て世代である自分達と年配者との温度差を感じる。子どもが花火をする場所を提供してもらえないなど、子育てしにくいと思うことがある。年配者も若い世代に寄り添ってもらいたいと思う。

→子育て世代と高齢世代が、地域の中で相談できる、支え合えるようになるとよいと思っている。貴重なご意見として伺っておく。

#### ご意見（サ）

○鶴ヶ島市に40年暮らしているが、普通車の相互通行ができない踏切が多く残っている。一本松駅の踏切については、是非解消してもらいたい。緊急車両が通れない場合もあるのではないかと心配している。

→踏切の混雑は承知している。現在、県では新たな407号バイパスから越生線をアンダーで潜り、県道日高川島線につながる道路の整備を進めているところである。

#### ご意見（シ）

○先日、予定していた地区清掃が中止になったが、次の日に市職員がやってくれたようだ。御礼である。

#### ご意見（ス）

○健康づくりやコロナ対策など、これまでの取組の効果を確認し、今後どうするのかを検討することが大事である。身体と心の健康づくりは、子どもの不登校等の問題にも大きく関わる。その点も踏まえて取

組を進めてもらいたい。市のホームページが分かりにくいので、分かりやすく発信してもらいたい。  
→厳しい社会を生き抜いていくために、心と身体の健康を保っていくことが大事であり、本市では心身の両面について相談に応じている。本市としてはスクールカウンセラー事業に力を入れており、県の予算で配置されるだけでは不十分であるため、市の予算を使い、他市より多く配置している。分かりやすい情報発信については、担当部局で対応を検討していく。

#### ご意見（セ）

○心の健康について、高齢者の鬱が深刻である。独居老人が増えており、精神疾患や認知症の進行が心配される。全国では自殺者も増えているようだ。高齢者の鬱に対する対策はどうなっているのか。  
→本市では、一昨年、高齢者の実態把握調査を行った。今後も調査を続けていく予定であり、高齢者の心身の健康を守っていく。  
→スマホの市公式アプリ「つるポッケ」を是非利用してもらいたい。一番は、防災無線が全て文字表示できること。災害時も即時に情報が届く。  
→今後も、できる限り皆さんのご意見を伺い、後期基本計画の策定に生かしていきたい。北市民センターを中心とする本地域が、高齢者から若者まで誰もが暮らしやすい地域となるよう引き続き取り組んでいく。